2022 年　10　月　13　日

2022年度 関西学院大学 海外客員教員(招聘A)成果報告書

（＊本報告書は本学ウェブサイト等で公開されます）

（適宜行追加可）

受入担当教員	所属・職	建築学部・教授
	氏名	山根　周
海外客員教員	所属・職	福州大学建築与城郷規劃学院・教授
	氏名	趙　冲
招聘目的		1. 授業担当及び研究　(2. 共同研究)　3. 特別枠　（いずれかに〇）
招聘期間		2022 年　6 月　17 日　～　2022 年　9 月　19 日
成果報告 以下の内容を記載して下さい。 1.授業担当及び研究 (1)授業科目名 (2)授業担当の成果 (3)研究の内容 (4)研究の成果 2.共同研究 (1)共同研究の内容 (2)共同研究の成果 3.特別枠 (1)活動内容 (2)成果の成果		1.　授業担当および研究 該当ありません。 2.　共同研究 （1）共同研究の内容 今回、建築学部、山根教授の招聘により、貴学に約3カ月滞在し、共同研究を実施する機会をいただくことができ、感謝申し上げます。山根教授とは、小生が滋賀県立大学大学院環境科学研究科修士課程に在籍していた約15年前より、研究室ゼミ、アジアの建築・都市に関する研究会、日本建築学会、アジアの建築交流国際シンポジウム（ISAIA）などを通じて研究交流を継続してきた。 山根教授はインドにおけるイスラーム都市に関する研究、インド洋海域世界における港市の研究、東南アジアにおけるインド系移民による都市形成に関する研究などを展開し、近年はミャンマーやマレーシアなどをフィールドに調査研究を進めている。　一方、小生は、博士論文（2013）において中国南部福建に位置する泉州・福州・漳州などの港市ついて研究し、当地の四合院や店屋について論じた。その後、中国福州大学建築学院に赴任し、近年は『海のシルクロードにおける伝統住居の空間構成とその形成原理に関する研究』（中国自然科学基金、研究代表者：趙冲（2021-2024））などで、東南アジアへと研究フィールドを広げ調査研究を展開している。東南アジアの都市に対する大きな関心は、華人によって形成されたショップハウスの形成とその空間構成である。中国南部の福建、広東、海南地方は華人（Overseas Chinese）の主な出身地であり、中国南部の港市と東南アジアの華人地区の比較が大きなテーマである。以上のような経緯の中で、2019年にマレーシアにおいて共同調査を実施したことが今回の共同研究の起点にある。 今回の招聘期間においては、シンガポール、マレーシア、インドのグジャラート地方を具体的対象として、各地の港市における華人、インド系移民の居住地に着目し、都市、街区、住居に見られる空間的特質と構成原理、その変容プロセスなどについて、臨地調査で収集した資料、データを基に分析する作業を中心に行った。 以下に、今回の共同研究の具体的成果を記載する。	

（2）共同研究の成果

I．シンガポール

シンガポールの国立公文書館National Archieves of Singapore（NAS）が保有する、1884年から1979年までに建設確認申請が行われたショップハウスの建設図面から入手した1890年から1930年までの263の事例について分析を行い、シンガポールにおけるショップハウスの成立とその類型について明らかにした。初期にショップハウス街の建設をリードしたのはG.D.コールマンであり、初期の事例として知られるのは、シンガポール川北岸のババ・ヨー・キム・スウィーBaba Yeo Kim Swee（陳旭年）の倉庫（1842）であり、1840年代半ばまでに、シンガポール川の南北に道路建設が行われるが、ショップハウス街の開発はまず南のチャイナタウンに対して行われ、1840年代末までにテンプル・ストリートまで建設が行われた。初期のショップハウスは2階建で、ヴェランダ部分の2階は付柱（ピラスター）とするような構造も少なくなく、ファサードにはほとんど装飾が施されず、開口部も簡素なものがほとんどであった。上記の236事例（ショップハウスは229棟）を分析し、下記図1のような類型化を行なった。ショップハウスの原型と考えられるのは、No.1884-9、No.1884-19である。基本的に、間口が1スパンで、1階前面にヴェランダ（上部は室内）を設けた切妻2階建で後部に平屋の厨房などのユーティリティ空間を付加した形式である。これを原型のタイプX1とした。No.1884-82は間口が2スパンであるが基本的構成はX1と同じであり、このタイプをX2とした。以下、X3、X4・・等の類型化も行なった。ショップハウスという用語は中国南部の「店屋」の英訳語として生まれ、その起源と展開に関して分析ができた。本成果は日本建築学会計画系論文集に投稿する予定である。

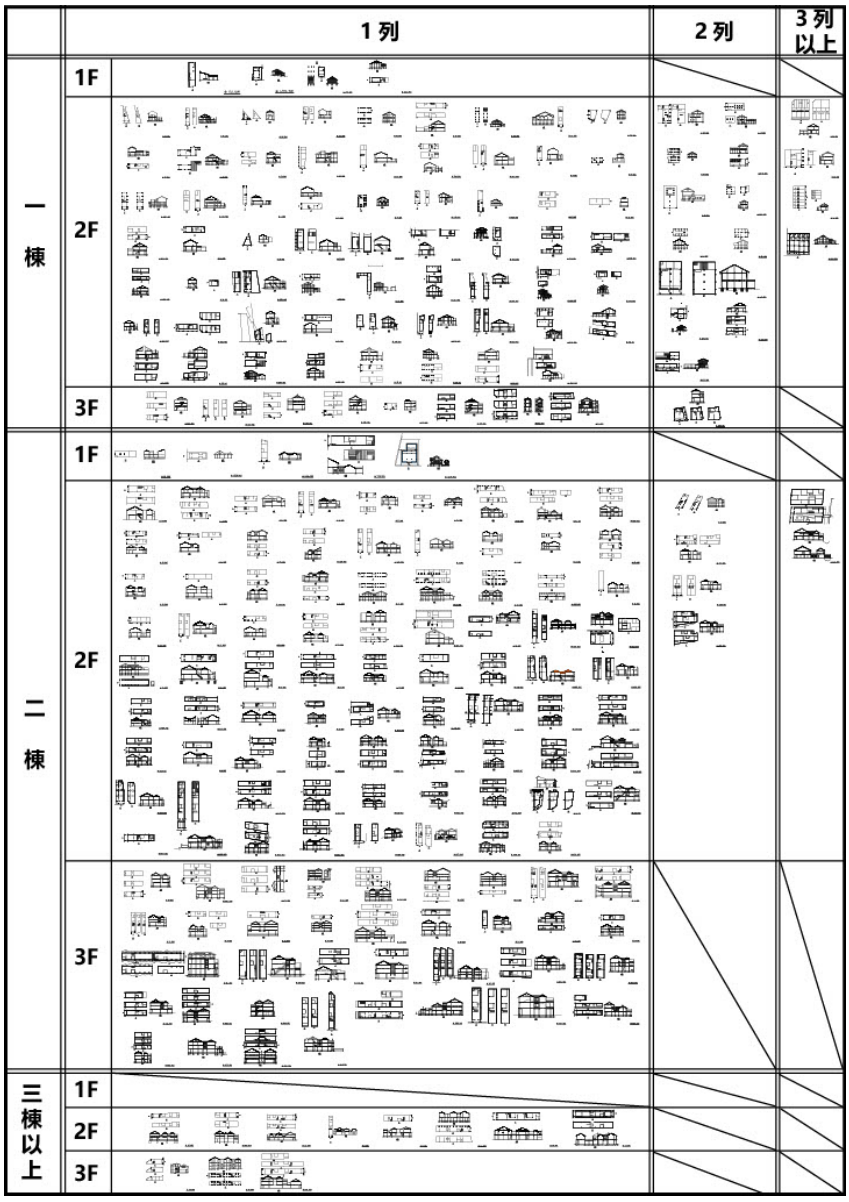

図1　シンガポールのショップハウスの類型化

II. マレーシア、ペナン

2019年の共同調査において、マレーシア測量地図局（JEPUM）ペナン事務所において、1890年代に作成されたペナン、ジョージタウンの地図資料（通称KELLY MAPS）の収集を行った。ジョージタウン全域をカバーする縮尺1/480の詳細な地図シート130枚を収集したが、今回の共同研究期間において、ジョージタウンの中心エリアについて地図シートを統合し1枚の都市地図を完成させることができた（図2）。この地図資料に基づき、今後都市構成の変容過程に関する分析を実施していく予定である。

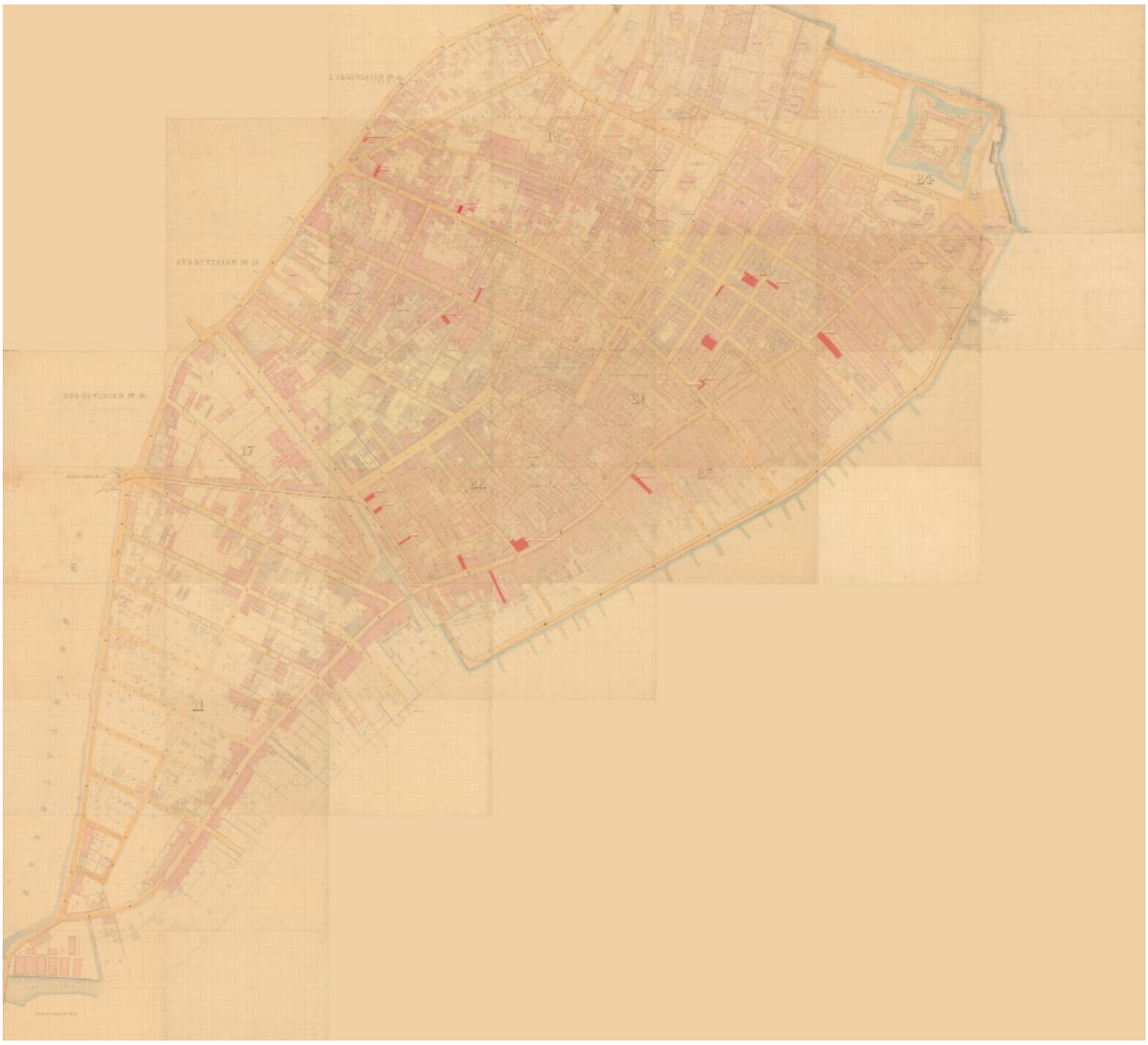

図 2 Kelly Map

マレーシア測量地図局（JEPUM）では、ジョージタウンにおける22棟のショップハウスの平面図も収集し（図2の赤で示した建物）、ジョージタウンにおけるショップハウスについて類型化を試みた（図3）。

ジョージタウン市街地の大部分を構成するのはショップハウスであり、マレーシアの中でも戦前の古いショップハウスが最も多く存在し、多文化の融合によりユニークな建築、文化、景観が掲載された港市として世界遺産にも選定されている。建物の階数分布と構造分布を見ると、市街地の多くの部分は 2 階建てのレンガ造である。現地調査データの分析から、2 階建てが全体の約 60%を占め、3 階建てが約 17%、平屋建ては 10%であることが明らかになった。一方、空き家、更地、改築中、建築中の建物や敷地も多数確認され、特に東側沿岸部の埋立地エリアに大規模な建築中の敷地があり、ショップハウスの町並みが損なわれる可能性が懸念されるが、大規模ホテルなどの開発敷地において、外観は低層のショップハウスに見えるように工夫されていたり、かつてのショップハウスの外壁を修復保存したり改修したりする事例も見られた。さらに、新築に見えるショップハウスも多数確認でき、ショップハウスの町なみの継承について、一定の努力、配慮がなされていることも明らかになった。

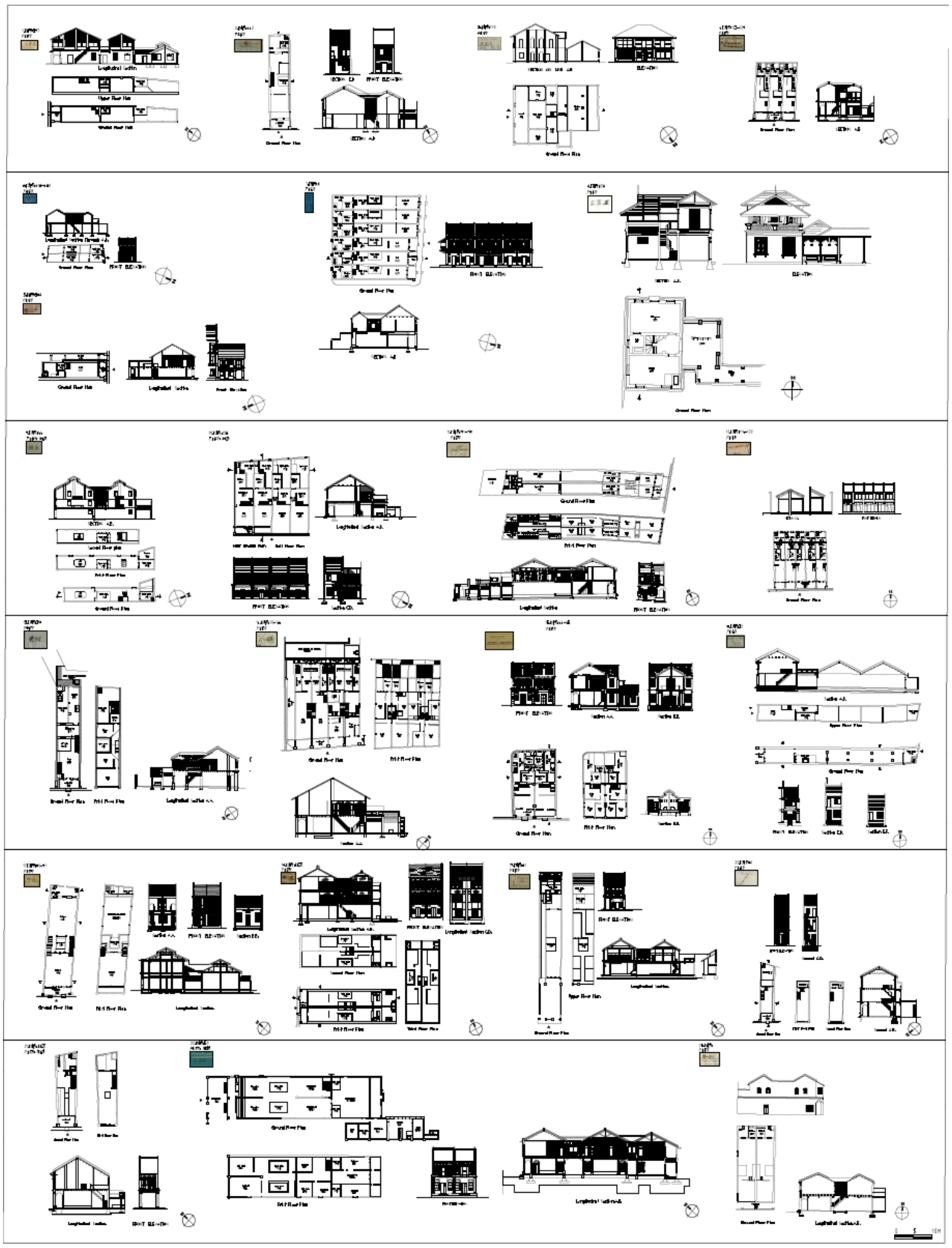

図3　ペナンのショップハウス類型

C.スーラト（インド、グジャラート州）

東南アジアのショップハウスに見られたような都市住居の空間構成の伝播は、インド洋海域の港市でも見られる。グジャラート地方スーラトに見られるガラ Gala と呼ばれる住居形式は、主として現地の有力商人であったボホラー商人によって形成されてきたとされるが、19 世紀以降ボホラー商人を含むグジャラート商人が多数移住したオマーンなどアラビア半島南部や、アフリカ東沿海部のいわゆるスワヒリ文化圏の港市にも同様の形式を見ることができる。今回の共同研究においては、グジャラート地方のスーラトを主な対象として、ガラと呼ばれる伝統的住居の空間類型（図 4）とその変容パターンを明らかにする作業を行った。以前入手していた報告書資料や文献から得られた図面資料および実測住居データ計 29 軒が立地する街区（a～ｆ）は、かつてはボホラー（ムスリム商人）居住地区（a, f）、バニア（ヒンドゥー・ジャイナ教商人）居住地区（b,d）、パールシー（ゾロアスター教徒）居住地区（c）に分かれていた。街区の空間構成は大きくはグリッドパターン（e,f）の街区と非グリッドパターン（a,b,c,d）の街区の 2 パターンに分類できる。この分類は極めて一般的であるが、グジャラート地方の北と南の集落パターンの違いが反映されているとする説もある。

街区を概観すると、一般的に宅地の形状は間口が狭く奥行きが深く、基本的な型はガラと呼ばれる間口 1 スパンの住居である。街路側から奥に向かって、前面の柱が建つ半戸外のヴェランダ状の基壇：オトゥロ otlo－玄関：カドゥキ khadki－中庭：チョウク chowk－テラス：レヴェシ reveshi－ホール・前室：パルサル parsal－寝室：オルド ordo という室が並ぶのが基本構成である。カドゥキに続いてチョウクを配置する構成は、農村住居の平屋の形式をベースとしていると考えられ、チョウクの位置はより後部に設けられる場合が多い。しかし、チョウクをもたない住居もある。Pramar（1989）によると、前者は北グジャラートのパターンで、後者は南グジャラートのパターンとされるが、南グジャラートのスーラトにもチョウク型は少なくない。間口 1 スパン、奥行 3～4 スパンでチョウクをもつのが図 4 の⑩⑬⑯⑲㉑㉓㉖㉗㉙、チョウクがないのが①②⑫⑮⑰⑳である。すなわち、スーラトの住居は、大きく、間口 1 スパンの一列型のタイプ：ガラ型と間口 3 スパン以上でチョウク（中庭）をもつタイプ：ハヴェリ型に分かれ、これは民族集団毎に形成された街区に共通である。間口が 2 スパン（ガラ）の住居についてみると、チョウクをもたない形式③もあるが、基本的にはチョウク型住宅となる（⑪⑭㉒㉔㉕）。⑭㉔のように基本型を並列するパターンもある。間口 3 スパン以上になると狭小宅地に対応した⑧⑱を除くと、それぞれ間口が広い中庭式住居となる（⑤⑨㉘）。

以上のように、スーラトの住居は、大きく、間口 1 スパンの一列型のガラ型と間口 3 スパン以上でチョウク（中庭）をもつハヴェリ型に分かれる。また、前者もチョウクをもつのが基本であるが、チョウクを持たないもの、後庭をもつものに細分化される。住居類型としては、数は少ないが他に連棟（二戸一）形式、チョウル（集合住宅）も見られる。ガラの形式は、農村住宅の形式が都市に持ち込まれたもので、平屋もしくは 2 階建てが基本であったと考えられるが、都市住居化の過程で 3～4 階建てのガラが一般的となっている（図 4）。

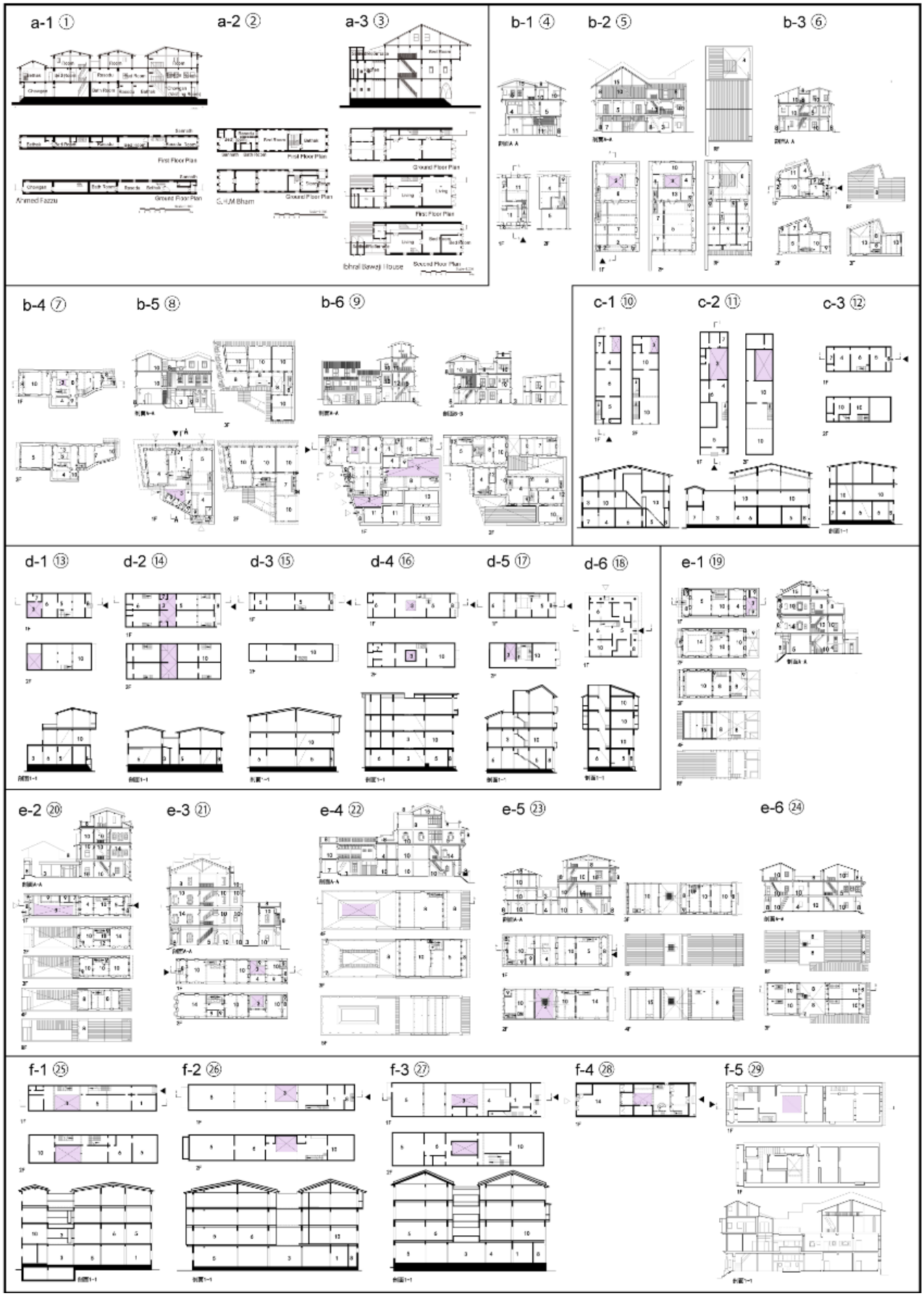

図4　グジャラートの住居類型